

# 細川 一

大洲市・西予市

## 1 細川一と水俣病



細川一

細川<sup>はじめ</sup>一は、日本の高度経済成長期に発生した熊本水俣病の発見者である。細川は、明治 34（1901）年、西宇和郡三瓶村（現西予市三瓶町）で生まれ、後に喜多郡大洲町（現大洲市）細川家の養子になった。細川は、熊本水俣病の原因企業である日本窒素肥料株式会社（のちのチッソ）の水俣工場附属病院長であった時に、水俣病に遭遇する。医師として今まで見たことも聞いたこともない患者の症状の原因はいったい何か、真夜中にまで及ぶ聞き取り調査を行い、チッソの工場から排出される廃液が原因ではないかという疑いをもった。細川はこれを立証するため、やむを得ず猫を使った動物実験を始めた。そして、実験を始めて 400 匹目の猫、通称「猫 400号」がついに水俣病の症状を発症した。昭和 34（1959）年のことである。細川はこの事実をすぐに会社へ報告し、工場の廃液が水俣病の原因である可能性を主張したが、チッソはこの事実を秘匿<sup>ひとく</sup>した。これ以後、工場の廃液は約 10 年にわたって排出され続け、水俣病の被害は拡大していった。

## 2 細川の人柄と苦悩

細川が水俣工場附属病院長に就任した当時、水俣工場では、社員と臨時採用の工員の間には厳然とした差別があり、その差別は病院内にももち込まれていた。どんなに順番を待っていても、当然と言わんばかりに社員が先に診療を受けていた。その様子を見た細川は、受付で番号札を配ることにし、差別を一切病院内にもち込むことを禁止した。患者に対して分け隔てなく接する細川の人柄は、地域の人々にも信頼を得ていた。地域の人々の生活や思いを大切にしてきた細川は「猫 400号」の実験結果を公表するかどうかで苦悩した。公表すれば工場の操業が止まる。それはチッソに関連する仕事に就いていた多くの水俣市民の生活を脅かすことになる。細川は悩んだあげくに公表せず、昭和 37（1962）年、病院を辞職して大洲市に帰った。

## 3 最後の証言

国が水俣病の原因をチッソの工場廃液に含まれる有機水銀であると断定したことから、患者や遺族による訴訟が始まった。

訴訟の中で細川の猫実験が注目されるようになり、がんに侵されていた細川は病床で臨床尋問を受けた。長い間言えなかった実験結果について証言をし、この証言が決め手となって訴訟は患者側の勝訴となった。その 3 か月後、細川は昭和 45（1970）年 69 歳の生涯を閉じた。西予市三瓶町には細川の生誕地の碑がある。



生誕地の碑

[参考資料]

NHK 番組 「その時歴史が動いた ーわが会社に非ありー」

愛媛県高等学校教育研究会人権・同和教育部会 「会報」第 38 号